視標「大谷、史上初の 50-50」

現代を象徴、力とスピード　　傑出した能力と外的要因

江戸川大教授　神田洋　2024・9・20

ドジャースの大谷翔平がマーリンズ戦で３本塁打、２盗塁をマークし、米大リーグ史上初の 50 本塁打、50 盗塁（50-50）を一気に達成した。パワーとスピードの両立を示す数字は、傑出した能力の証しである。背景に規則変更という外的要因もあるとはいえ、現代を象徴する快記録だ。

大谷は過去にシーズン 40 本塁打以上を２度記録した。「二刀流」から打者に専念した今季、50 本塁打は不思議ではない。特筆すべきはこれまで 2021 年の 26 が最多だった盗塁数の激増である。

ニューヨーク・ポスト紙などでコラムニストを務め、現在エンディコット大でスポーツジャーナリズムを教えるケン・デビドフ氏は「大谷が最高の選手であるのは明らかだが、全ての数字には背景がある」と述べ、新ルールが盗塁増を生んだことを強調する。

昨年、大リーグは試合時間短縮のため新たな規則を定めた。その一つが投球動作中断の制限である。新ルールでは、投手は１人の打者に対して２度までしかプレートを外せない。けん制球や守備側のタイムも含まれる。これが走者を大きく利した。

22 年に１人だった 40 盗塁以上は昨年６人に増えた。22 年までの５年間で１人もいなかった 50 盗塁以上は３人だった。

走者は投手の癖を盗むだけでなく、けん制球の可能性が低い、あるいは「ない」と判断して走ることが容易になった。昨年、投手としても新ルールを経験した大谷なら、なおさら投手心理を読んで走れるだろう。

盗塁が容易になったといっても 50 本塁打の難易度は高いままだ。今季は大谷とヤンキースのジャッジが 50 本塁打を記録。両リーグの本塁打リーダーが 50 本を超えるのは７年ぶりである。

ベースボール・アメリカ誌によると、大リーグ投手の速球の平均球速は昨年、１５１・６キロ。投手の動作解析の普及などにより、現行方法で計測し始めた 08 年から約３・７キロ速くなったという。

レベルアップし続ける投手を相手に本塁打を量産する鍵はデータの活用にある。ボールや選手の動きを追尾するシステム「スタットキャスト」が 15 年に本格導入され、選手は自分にとって長打になりやすい打球角度を把握し、スイング軌道の調整を図るようになった。これが長打の確率を上げるため飛球を狙う「フライボール革命」である。

トップに君臨し続けるには、試合ごと、打席ごとにこうしたデータを確認してスイングを調整する柔軟性が必要となった。大谷もベンチでタブレット画面を見つめる姿がたびたびテレビ中継で映されている。

初の 40-40 は、1988 年にカンセコ（アスレチックス）が記録した。彼は 2005 年に筋肉増強剤の使用を告白。40-40 でのＭＶＰ受賞をきっかけに「ホセ（カンセコ）に効果があるなら、他の選手にも効くはず」と薬物が広まった経緯を著書で述べている。

今では考えられないが、大リーグは 03 年まで筋肉増強剤使用者への罰則がなかった。40-40 は「ステロイド時代」の幕開けであり、50 本塁打が珍しくない時代が 10 年ほど続いた。

ただ、それでも達成されなかったのが 50—50 である。歴史的瞬間を実況したアナウンサーは「これは現実じゃない。彼は人間じゃない」と驚愕（きょうがく）した。カンセコの 36 年後、大谷の偉業はテクノロジーの時代を象徴すると同時に、他の追随を許さない個の存在を際立たせた。

×　　×

かんだ・ひろし　1966 年東京都生まれ。米国で長く大リーグを取材。2017 年より現職。専門は米国スポーツジャーナリズム。